

164 日本の近代植物学の父 - リュドヴィク・サバティエ（2023 年 6 月 1 日）

前回、19 世紀に日本のユリがヨーロッパで人気を集めたことをご紹介します（*）。今回は、日仏交流史研究家のクリスチャン・ポラック氏の研究を元に、日本の植物学の発展に貢献したリュドヴィク・サバティエ（1830-1891）の功績をご紹介します。

1866 年、海軍医であったサバティエは、横須賀製鉄所（後の横須賀造船所）の建設を監督したレオンス・ヴェルニーが引き連れて来た 50 名を超える部下の一人として、横須賀へ到着しました。製鉄所の衛生部長として病院の体制作りを進めながら、製鉄所で働くフランス人や日本人疾病者に必要な治療を施しました。

サバティエは、植物学に高い関心を持っていたことから、医師として働く傍らで、植物採集も行いました。収集した植物の標本は、パリにある国立自然史博物館へ送られました。サバティエに協力したのが、同博物館の学芸員で研究者であったアドリアン・フランシェ（1834-1900）でした。医師としての仕事が忙しかったサバティエは、地方まで足を運ぶことが難しかったため、他の協力者の力も借りながら日本の植物の採集を続けました。最終的に、サバティエがフランスにもたらした日本の植物の標本は 15,000 点にのぼり、1,800 種を数えました。これは、当時知られていた日本の植物の約半数に当たると言います。中には、新種の発見もありました。採集と同時に、ヨーロッパに順化できそうな植物の探求にも努めました。日本の植物学者との間で植物の交換を行いました。サバティエがフランスへ送った植物の中には、貴重な日本原産のヤマユリ（学名：*Lilium auratum*、仏語名：*lys doré du Japon*（直訳すると、日本の黄金色のユリ））も含まれていました。

サバティエが日本で採集した植物の標本は、現在でも国立自然史博物館に保管されています（写真右。常設展示はされていません。）。約 150 年前の時を経た日本の植物をフランスで目にしたときは、19 世紀に日本の植物を採集したフランス人がいたことと標本の状態の良さに驚きと感動を覚えました。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

サバティエは、日本滞在中に、ヨーロッパの植物を日本へ順化させることにも成功しました。横須賀の自宅の庭にヨーロッパから送られてきた苗木や野菜を



植えて、日本の土地に合う植物を探しました。サクラ、アンズ、スモモ、ナシ、大粒のイチゴ、レタス、インゲンマメ、タマネギなど、様々な種類の木や野菜が植えられました。1873年に、彼がその数年前に東京にある小石川植物園に送ったサクラとモモの木に果実が実りました。これは、日本で初めて獲れたサクランボでした。

サバティエは、研究成果を本にまとめました。一冊目は、「花彙」という日本の植物図集の仏語訳で、二冊目は、アドリアン・フランシュとの共著「日本植物目録」です。後者は、本格的な日本の植物図鑑でした。これらは、ヨーロッパに広く日本の植物や植物学について伝える書物となりました。

これらの功績から、クリスチャン・ポラック氏は、サバティエは「日本の近代植物学の父」であるとおっしゃいます。日本からフランスへもたらされたユリ、フランスから日本へもたらされたイチゴやサクランボは、一例に過ぎません。サバティエの足跡は、私たちにとって身近な花や果物を含む植物が、100年以上前の植物学者たちの熱意と努力によって、それぞれの土地に根付いたものであることを教えてくれます。

最後に、右の写真の植物は、フラサバソウ（学名：Veronica hederifolia）と言います。これは、日本で最初にこの植物を採集したサバティエの「サバ」と協力者であるフランシェの「フラ」を組み合わせて、和名でフラサバソウと名付けられました。ここにも、サバティエの足跡が残されています。今度、道端を歩いてこの小さな植物を探しながら、日本とフランスの植物の交流の歴史に思いを馳せてみたいと思います。



163 ヨーロッパ人を魅了した日本のユリ